

文化五年二月

春立と狙も袖口さゆる也
初蝶もやがて鳥の扶食哉
春の蝶牛は若やぐ欲もなし
仇し野や露に先立草の蝶
とぶ蝶の人をうるさく思ふらめ
葬のからみしまゝの櫻哉
つかくそちり恥からぬ櫻哉
山櫻髪なき人にかざさるゝ
米踏みも唄をば止よ櫻ちるゝ
乞食も一曲あるか花の陰
花さくや足の乗物手の奴
又しても橋錢かはる花見哉

廿八日 小雨

曾我殿にまけじくと雛哉
雛祭り娘が桐も伸にけり

廿九日 晴

卅日 雨

三月

一日 晴雨 八ツ時晴

二日 晴 閑齋

三日 雨

四日 雨 閑齋

五日 晴

六日 晴 五ツ目菜雨ニ行

文化五年三月

文化五年三月

七日 晴 隨會

せめてもごお花の草を蒔にけり
尻餅もやすらひ花よ休らひよ

八日 晴

九日 曇 築地西本願寺より二本榎 麻布
善福寺ニ参ル 御門主御入

十日 朝雨 今日より卅日迄六アミダ
千百年供養始

十一日 雨 南風

十二日 雨 晝晴 夜雨 閑寂

鳥の巢をやめるつもりか夕の鐘
鳥の巢もはやいく度目の榎哉
浦人のお飯の上もかはづ哉
山の鐘蛙もごしのよりぬべし

ちる花を口明て待かはづ哉
尻尾から月の出かゝる雉哉

さよ姫のなまりも床しつまね花 史邦

イ玉かつらとあり 風仙花也 筑前の方言也 是又隨齋翁説也

ちる花をかまはぬ雉の寝さま哉
山寺や雪隠も雉の啼所
花咲くや櫻の下のばくち小屋
雛の日もろくな櫻はなかりけり
あさちふの雛も長閑きお顔哉
煙たいとおぼしめすかよ雛顔
又雛に見申けり藪の月
雛市やかまくらめきし薄被

文化五年三月

文化五年三月

白魚やきのふも龜の放さるゝ
白魚や蝶が立つてもおそはれし

十三日 雨

十四日 朝雨

十五日 寒風

十六日 晴寒

十七日 雨 隨會

○花 盛 必 風 の は や り け り

いさゝらば死ケイコせん花の陰
ちる櫻けふもむちやくちやくらしけり
花さくや目を縫れたる鳥の鳴
何ぞ舞へ藤引かつぐ昔笠
棚つけて一度も咲かず藤の花

○うぐひすもうかれ鳴する茶つみ哉
ちる花にはにかみとけぬ娘哉
我門や何をとりえに雉の鳴
のらくと山も立らんかへる雁
菜の花もはらりとひき茶哉
煤唄に笠も櫻の咲日哉
そろくと蝶も雀も汝干哉
我麥もわるくは見えぬ汝干哉
麥の葉に汝干なぐれの鳥哉
御つゝし汝干くに古びけり
棒梧のあはうに長き日ざし哉
草をつく石の凹みや暮遅き
花ちりてケツクリ長くなる日哉

文化五年三月

文化五年三月

ほちややくと鳩の太りて日の長き
 春の日や雪隠草履の新しき
 ○蚊所の八重山吹の咲にけり
 咲たりな山々吹の日陰花
 山吹や培ふ草は日まけして
 山吹は時鳥待つつもり哉
 壁の穴幸春の雨夜哉
 春雨やかまくら雀何となく
 春の夜や一の寶の火吹竹
 古郷や草の春雨歎祭
 梅がかにうかれけり不性猫
 鶯もなまりを直せ猫の戀
 十八日 雨折々雷

十九日 曇

廿日 晴 山下五番阿彌陀參

上野 角田川 隨齋花見今日也

廿一日 晴 西本願寺御歸東海道

山吹や家近き松は日和負

廿二日 雨折々

廿三日 大南風 一茶菴吹破

申刻雨風

御門主の籠松明や春の月

廿四日 晴 兵と三巡

廿五日 晴 申刻雨 隨齋心匪會

廿六日 晴 夜雨

白魚に大泥龜も遊びけり

文化五年三月

文化五年三月

白魚のどつと生るゝおぼろ哉
江戸川に氣つよく見えぬ白魚哉
山吹や家近き松は果報焼

廿七日 巳刻より晴

草刈に足もと見よと百合花 素堂

悪酒や此時鳥此木立
角田川ごこから春は暮るゝぞよ
薄霧の足にからまる秋の暮
山盛の花の吹雪や犬の枕
鶯の咽かはかする日永哉
隣から竹そしらるゝ日永哉
さく花や深山鳥の口果報

手ばかりしかく春は暮けり寛永時

咲花や彼梅若の泪雨

桃苗は花を持ちけり數珠嫌

木母寺は夜さへ見ゆる時鳥

片里はかくれ鯉も月夜哉

酒好の蝶ならば來よ角田川

廿八日 晴

廿九日 夕立雨

物戀 鳴の來鳴也

山鳥のほろく雨やとぶ小蝶

卅日 雨

文化五年四月

文化五年四月

四月

一日 小雨又晴 隨齋入湯延引
浙江歌仙終

二日 朝雨晴

鶯の寝所迄も蚊やり哉

山咲の水くしさを蚊やり哉

夕飯も山水くさきわか葉哉

三日 雨成美 浙江 宮根湯出立

四日 雨

朔日のしかも朝也時鳥

五日 雨晝より晴

六日 晴

七日 晴

柴門や蚊にいぶさるゝ草の花

八日 晴 松井と灌佛参

茅場丁薬師

藤棚も今日に逢けり花御堂

西本願寺

灌佛にとんしゃくもなし草の花

九日 晴

十日 晴

十一日 晴

十二日 雨

十三日 雨

十四日 雨

夕暮の三百泣に雇はれて

十五日 晴

文化五年四月

文化五年四月

春は花の下にかたむく日影哉

ナクキ秋は月の前に明行空を怨み

十六日 晴

發スマシキハ弓とりの青道心 膝振ひ心迷ふ

十七日 晴 千住通り流山ニ入

十八日 晴

○蚊の出て空うつくしき夜也けり

杜若夜は家鴨も寝ざりけり

古わらぢ螢ならは角田川

四五人の山吹そよぐ蚊やり哉

巢立鳥夜の短かいか月に見ゆ

草戸もあれば朝夕蚊遣哉 双樹

短夜をけしきばかりの枝折哉 同

不性者蟬の羽衣着たりけり

蟬ばかり涼しき衣きたりけり

十九日 晴 未刻大雷 氷降

小金より根木内通り布川ニ入

廿日 晴 午刻大雷雨

廿一日 晴 田川に入

門の月かはほりとも、ほたへけり

かはほりよ行く京の飯時分

かはほりの抱古したる柱哉

かはほりや相馬の京も小千年

汁なべの門にさげ行螢哉

文化五年四月

文化五年四月

くすくすと蝶の寝さまを蚊やり哉
寝所も五月雨風の吹にけり
夕暮の蟲を鳴する哉
夕顔の花めで給へ後架神
○蠅負や花なでしこに及ぶ迄
蠅打に敲かれ玉ふ佛哉
夕顔の長者

御侍團と申せ東山

廿二日 晴

露おくや晩の蚊やりの草の花
夏菊の花ととしよる團哉
草の蚤はらりくともごる也

廿三日 曇南風 夜九ツ半時地震

笋や憎れ草も伸支度
笋や鶯親子連立て
笋や門の葎もおとらじと
短夜に竹の風癖直りけり
短夜を繼たしてなく蛙哉
月のさす松も持けり夏念佛

廿四日 晴又曇 小金ニ入 成美歸ル

廿五日 晴庵ニ入

時鳥聞所とて藪蚊哉
うつくしき花の中より藪蚊哉
門酒を藪蚊も祝へ朝の月
岩くらやサモナキ家の青簾
夜雨して夜の朔日ぞ青簾

文化五年四月

文化五年五月

簾して寝て見たりけり山の様
夕顔やはらく雨も福の神

廿六日 晴

文化四年八月二十六日心可没

廿七日 晴

廿八日 晴
柏原孫介参る
王子行

廿九日 曇

五月

一日 晴

二日 小雨

三日 晴

法 加 七 以 九 拂

辛 癸	丁 戌	庚 壬	丙	乙	巳 甲
-----	-----	-----	---	---	-----

九 子年九 一時雨

八 丑未八 二日和

七 寅申七 三朝雨

六 卯酉六 四曇
五狂

五 辰戌五 六日和ニテ今日有變
七雨

四 巳亥四 八風
九村雨

惣枚百十七枚



UW

茶

大正十三年七月五日印刷
大正十三年八月八日發行

一茶旅日記
定價 貳圓九拾錢

著者 俳諧寺一茶

藏版者 入村誠

解說者 勝峰晉風

發行者 東京市外西大久保四五九番地 橋本福松

印刷者 東京市麴町區紀尾井町三番地 福王俊禎



發兌元

東京市外西大久保四五九番地
振替東京三五三四〇番

古今書院

東京印刷株式會社發行所印

~~100~~
~~100~~

529
33

終

